



娘にとって献血は、いのちのリレーみたいなもの

6歳・峰山真彩ちゃんの場合

家にいられる、食事ができる その、当たり前が幸せ

「娘にとって献血は、いのちのリレーみたいなもの。輸血パックには採血された場所が明記されているんです。ある時、そこに『沖縄』と書かれていて……娘と二人ですごく感動したのを覚えています。遠く沖縄からはるる海を越えて、うちの子を助けるためにやって来てくれたんだあつて」——真彩ちゃんが急性リンパ性白血病を診断されたのは、わずか5歳の時。それ以来、お母さんと二人三脚のような形で闘病生活を乗り越えてきました。

「おしやまな女の子なんでね……髪が命だったんですよ。だから私に切られた日は、相当にショックだったみたい。わんわん泣いてました」。

抗がん剤の副作用で髪が抜けるのを心配し、お母さんが真彩ちゃんの髪を短く切り揃えた頃は、「次はどうなるんだろう」という先の見えない不安にさいなまれていたそう。「それでも、輸血を受ける時は『大丈夫、また助かった』と

思えました。誰かの血液がこの子の体の中で根付くということが、初めはどこか不思議だったんですけど、実際にこうしてとんとん元気になるっていく。とにかく『ありがとう』の気持ちでいっぱいですね」。

入院中の栄養摂取は点滴。他の子と同じようにご飯が食べられない真彩ちゃんの姿を見て、とても辛い思いをしたというお母さん。「今はこの子が家に帰って来て、家族みんなで一緒にご飯が食べられる。その、当たり前の生活こそが、かけがえのない幸せなんだと心から実感できるんです」。

ちなみに真彩ちゃん本人に、「好きなこと」を尋ねたところ、こんな答えが返ってきました。「お母さんの料理は全部大好き。お風呂も好き。だからお風呂に入ったら、お母さんの背中也洗ってあげる」。

PROFILE 昨年2月に急性リンパ性白血病を発症。現在は通院しながら病気を自慢できるようなりまで、もう少しだけ我慢

NAVIGATION

献血から医療機関まで血液がたどる道

預けて、集めて、つながっていく 献血が「いのちの糸」になるまで

献血をしたら、その後を知ること大切。みんなの血液でこうやって、人の命を救っています。

